

文化 批評と表現

嵐風快晴 夏山とゆく

「多くの人々の良心をマヒさせてゆくのは、かかる社会の指導者のキマグリな非良心的な行にあるといえます。そういう人々の社会的責任の大きさを強調していただく」

これは、小説『氷壁』が朝日新聞に連載されていた1957年(昭和32)年4月、作者の井上靖にあてられた長文の手紙の中の記述。差出人の石岡繁雄さんは、小説のモデルになったナイロンザイル切断事件の当事者である。

手紙は、作家に次々注文する。①〜⑧と個条書きで以後の展開の希望を具体的に述べた末、「要するに『氷壁』の結びは……」と、結末部分の提案までしている。同じような手紙は他にもいくつかのり。

「井上さんを情報攻めにしていく。しつこいです」と次女のあつみさん(56)が苦笑する。石岡さんは昨年8月、88歳で亡くなった。豊田、鈴鹿高専教授(応用物理)のかたわら、登山や高所作業の安全性向上に打ち込んだ登山家だった。

穂高岳

ナイロンザイル事件と『氷壁』の真実

材。それがなぜ簡単に切れたのか。登山者の安全はどうなるのか。岩稜会会長でもあった石岡さんは衝撃実験の結果、ナイロンザイルが鋭利な岩角に弱いのを確認した。

ところがである。ザイルメーカーは同年4月、愛知県蒲郡市にある工場で、大阪大教授で日本山岳会関西支部長でもある登山用具の権威に委託し公開実験を行った。通称 蒲郡実験。結果

の不正追及がない。教授に当たる人物もさしてワルではない。描写は男女の人間模様へ傾き、肝心のザイル切断の原因は最後まではっきりしない。はっきりさせないことで読者を引きつける展開……。



<穂高岳へのアクセス> JR松本駅から電車とバスあの上高地まで2時間弱。とは徒歩のみ。

遭難の時、若山さんの隣でザイルを握っていた石原國利さん(76)は「井上先生は『事件の真相を離れ、素材として使わせてくれ』と言われた。こちらも承

う。私も『蒲郡実験のインテキを書いてくれ』とお願ひしてしま。先生は『原因がわからなくて困っている主人公の立場を書きたいんだ。君たちの気持ちはわかるが、私の書いているのは小説だし』と困った顔をされていた」と振り返る。

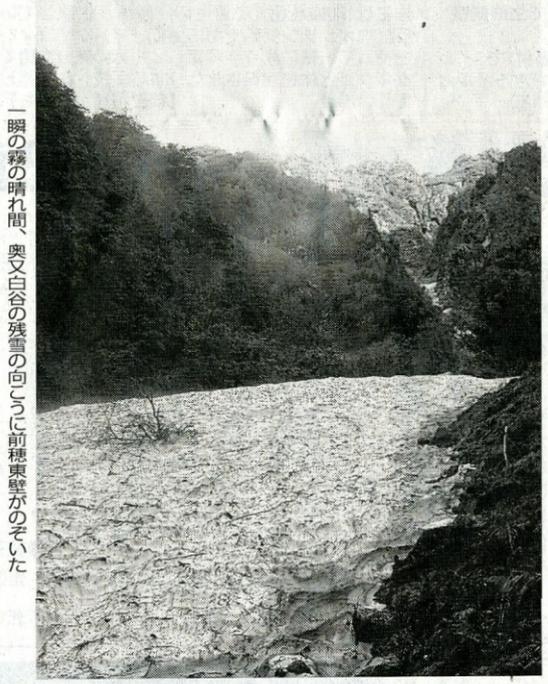
その後の推移は石岡さんの正しさを証明している。登山用ロープの安全基準が設けられ、日本山岳会の『山日記』から阪大教授の偽りの記述が削除された。しかし、20年

そんな事情もあってか「事実」に反する『氷壁』は石岡さんにマイナスだった」とする見方もあるほどだが、あづみさんは「『氷壁』が勧善懲悪のつまらないものになったら、世の中がシーンとして事件の追及もおしまいだった。父は『氷壁』に

に魅せられ、重要な舞台の徳沢にまで足を伸ばすハイカーが増えるかもしれない。小説『氷壁』を堪能したら、次はぜひにも現実の事件を知ってほしいところだ。

深田久弥『日本百名山』に触発された登山ブームが続く。この夏、自然と人間の深みに、もう一步踏み込んだ山の楽しみ方を描いてみたい。

事件の記録、書簡、公開質問状などの生々しい資料も盛りだくさん。『氷壁』とは力点の違う石岡さんの奮闘した世界に引き込まれる。【伊藤和史、写真も】



一瞬の霧の晴れ間 奥又白谷の残雪の向こうに前穂東壁がのぞいた

前穂東壁の登り口近くにある遭難者のケルン。中央が若山五朗さんの追悼ケルン



感謝していた。ただ、何にでも頼りたかった気持ちに井上さんへの手紙に表れたのだと思います。長野県・上高地。河童橋から梓川沿いに2時間、徳沢まで来ると対岸高くに前穂東壁が望める。奥又白谷をさかのぼる。岩壁が一層迫ってくる。途中、若山さんの追悼ケルンが登山者を見守っている。井上靖生誕100年の今年、新潮文庫『氷壁』が書店には平積みだ。初めて『氷壁』